

# 私の五月二五日

武山 とみる

本町一丁目

五月二五日、この日は夫が三度目の召集で横浜に入隊した日です。この夜、東京山の手の大空襲で、私は九死に一生という忘れがたい体験をしたのです。姑に複雑な事情があり、私らとの折り合いが悪かったので、姑と同居人二人は疎開中でしたが、夫の出征のため上京していました。

私は夫を横浜の部隊まで送り、帰途はたびたびの空襲で、小田急線と横浜線を乗り継いで帰宅となり、かなり遅くなってしまう、夕食も済まないうちに、またも警戒発令に引続き空襲警報となりました。私は身支度を整えて外に出て見ると、西の空が早くも赤く染まっていました。必要な物を地下防空壕に投げ込み、朝使った赤飯のセイロや鉄釜、釜蓋などを防火水槽の中に沈めると、当時貴重だった木綿の衣料などを包んだ大風呂敷を背負って外に出たところ、早くも空からはパチパチと音をたてて火の粉が落ちて来ます。警防団が「早く避難しろ」と叫び回っていました。私は手拭を防火用水で濡らし路地に飛び出しましたが、すでに道路の方は火の海です。反対側の坂道に来

ると何か背中が熱くなり、振りむくと背負った風呂敷包に火がついていたので、思い切つて荷を捨てて進みました。やがて前方から自転車に乗って来た人が、「坂上から来たがとてもひどい、こっちも駄目か」と叫び、立ち止まりました。

私は昨日から夫の入隊の支度や跡片付け、また、今日は夫の入隊で横浜の部隊へ行き、度重なる空襲による交通の混乱のため、家に着いたのは夕方近くでした。そんなことですから疲れれていた私は、もう逃げる気力もなく路上に座り込んでしまいました。自転車の男の人は私を見ると、自転車を捨てて力一杯に私の手を引いて、黙々とこの坂道からの逃げ道を探し、行ったり来たりして、やっとのことで夏草の生い茂った崖の上に出ました。二人は一步一步確かめて崖を降りましたが、道は火の海です。その道路の端を一気に走ると青梅街道で、ここはまだ火の手は回っていませんでした。向こう側に渡ると神田川の淀橋のたもとに出ました。川岸の空地に立った私に、男の人は「ここまで来ればもう大丈夫だ。川の中に入りなさい」と言うので、

川岸の鉄梯子を降りました。川の中に入ると避難者でごった返していました。私はコンクリートの出っ張った所に腰を掛けるのと、いつの間にかそのまま寝入ってしまった。やがて目が覚めると、横の瀬音がザーザーと心地よく、昨夜の芋を洗うような人影はなく、五月の太陽を受けて一人川の中に入っていたのです。私は生きていたのです。夢ではない。昨夜の自転車の青年と二人で、生と死の谷間を走り抜けて助かったのです。

その青年はどうしたであろうか。せめて名前だけでも聞いておけばと悔やまれました。あの行動力と判断力のある人だから、きっと無事であるのに違いないと自分に言い聞かせ、防空頭巾を脱ぎ、川の水で顔を洗い、鉄梯子で地上に出ました。人々が三三五成子坂の方に行くので尋ねると、淀橋病院（現在の東京医大）で目の治療をしてくれると言います。その患者の行列は坂下から病院まで長々と続いていました。治療を終えると、私は一目散に我が家に向かって歩き出しました。見渡す限りの焼け跡で、我が家は瓦礫でなかなか見つかりませんでした。昨日赤飯を蒸した釜の木蓋が、防火用水の上に焼けこげて浮いているのと、臼がそのままの形で堅炭になっていたので分かりました。

さて、夫の出征で上京していた姑らは警報とともに早々と避難しましたが、どうしたでしょうか。無事であるのを祈りつつ、昨夜の男の人の言葉に思わず坂上の青梅街道に足が向きました。

途中、うつ伏せで死んでいた老人や、焼夷弾直撃で悲惨な姿の死体を見ながら、夕暮れの鍋屋横丁辺りまで行きましたが、分かりませんので、我が焼け跡に戻りました。さてこれからどうしようと思案にくれましたが、昨夜から飲まず食わずで急に空腹を覚え、昨夜の赤飯の残りをおにぎりにして貴重品袋に入れて逃げたのを思い出し、焼け跡の土台石に腰かけ無我夢中で食べて生き返ったような思いでした。その時、向かい側の家との間に夫が出征前に掘った小さな防空壕を思い出し、灰と瓦礫を払いのけると、トタン張りの四〇センチ角ほどの蓋が現れ、開くと微かに焦げた程度で、昨夜投げ込んだ道具、衣類のほか本箱、机などが無事だったので、思わず涙が出ました。小さな出入口が幸いして焼けずに残ったのでしょうか。狭い壕内の家財の隙間が今夜から私の住み家なのです。その狭く暗い壕の中で目を閉じると、過去のさまざまなが頭の中を駆けめぐりました。古い家族制度の中で姑と同居人と夫との間に挟まれて陰悪な毎日を過ごして来たこと、文京区の両親兄弟のことなど思いながら深い眠りにつきました。

翌日からは、朝起きてから暗くなるまで焼け跡の瓦礫片付けが日課となり、一人暮らしの責任感から近隣の人々に負けないように頑張り、米軍の偵察機が低く来ても恐れることなく続けていました。やがて向かいのおばさんの教えて焼けたトタンを拾い集め、防空壕の廃材を利用し、実家の父の手で堀立小屋が出

来ました。私はこのバラックの中でやっと足を伸ばして寝ることが出来、その嬉しきは忘れられません。また、次は拵げた空地に野菜を作って見ようと、夢は次第に広がっていききました。

八月に入って、十五日に「重大放送がある」との布令があり、近所の小高い広場で陛下の玉音放送を聞きました。放送は雑音に途切れがちでしたが、「忍び難きを忍び…」と言う敗戦の言葉に、皆首をうなだれ泣きました。真夏の太陽の下で、私も汗と涙がとめどなく流れました。

九月に入るといよいよ軍の解散で夫も復員し、バラックの中でしたが、初めての二人きりの生活が始まったのでした。こうした終戦前後の生活は今想えば想像外でした。配給も行われませんが、近くの味噌工場の焼け跡で焼けた味噌を拾って来たりして飢えを凌ぎ、時には玄米の配給もありましたが、ほとんどはさつま芋、または米軍放出の砂糖や乾燥バナナなどが主食としての配給です。玄米は二リットルの瓶に入れて、塵はたきの竹の柄を突き込んで、気長に星空の下で精白したものです。

やがて新しい年を迎え、私は初めての子宝が授かりました。その暮、予定日を迎え、陣痛を感じ、夜になって急ぎ入院ということになり、リヤカーに夜具、日用品を積み、今の中野総合病院まで夫の引くりヤカーの後に付いて行きました。途中陣痛がひどくなりましたが、入院すると直ぐ長女が生まれました。退院の時の支払いには、持っていたカメラをやっと売却して退

院出来たということも、今では思い出なくなっています。

昨年は私ら夫婦が結婚して五〇年余。さまざまな苦難がありました。共に丈夫で今日があるのはあの五月二五日の大空襲の時、行きずりの青年に助けていただいたおかげと深く感謝しながら、七四歳の私は戦災記念日に当るこの二五日、五月晴れの緑を眺めながらこれを綴りました。

